

英語ライティングラボの開設と運営

——ライティングチュータープログラムの可能性——

森 越 京 子

目次

- I. はじめに
- II. 先行研究
- III. 本学科英語ライティングラボの概要
- IV. ライティングラボ運営について
- V. ライティングラボ設置・運営上の問題点
- VI. ライティングラボの可能性
- VII. 結語

I. はじめに

本稿では、日本における英語ライティングセンターの設置と運営、その可能性について、北星学園大学短期大学部英文学科において始められたライティングラボの取り組みを通して考察する。また、運営上の問題点、これからの英語学習者支援の可能性について述べる。

1996年度より、北星学園大学短期大学部英文学科では、英語による一般教養科目を2年生の選択必修科目としてカリキュラムの中心に位置づけており、学科の特色的な取り組みとして年々、充実した内容となってきた。現在、英語による一般教養科目は8科目用意されているが、担当の教員からの指摘が多いのは、学生の英語ライティング力の問題である。学生は、英語によるテスト、レポートなどを課されるが、パラグラフライティング力の欠如が指摘され、高いレベルのライティング力、アカデミックライティングについて学ぶ必要

性が求められている。学生は、1年次に必修科目として英作文の授業を取り、少人数のクラスで指導を受けているが、基本的な英語パラグラフライティングの方法を定着させ、比較的長いレポートを書きこなす力をつけるにはかなりの時間が必要である。また、近年、学生の英語運用能力は多様化しており、それに対応するためにも、それぞれのニーズにあった支援が必要であると考えられた。そこで、授業外でも英語ライティングを支援する、ライティングラボの設置が急がれた。

平成17年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)において本学の取り組み「専門職業人となる人材の基盤的英語教育」(次世代版カリキュラム開発と英語能力取得のための環境作り)が採択された。そのプログラムの一部であるライティングラボの運営も3年目を向かえ、運営上の問題点、マニュアルの必要性、チューターガイダンスの重要性などが見えてきた。それと同時に、さまざまなレベルの学生のそれぞれのニーズにあった学習支援を可能にする優れたプログラムであるということを実感している。欧米の高等教育機関ではすでに定着しているライティングセンターであるが、英語はまだ外国語 English as a Foreign Language (EFL) であるという日本の状況で、英語ライティングセンターが果たすべく機能について考えていく。

キーワード：ライティングセンター、チューター、EFL

II. 先行研究

1. ライティングセンター（ラボ）の基本的な概念

欧米の大学では、ライティングセンターの歴史は古く、現在のようなライティングセンターとして広く認知され始めたのは、1970年から1980年代であり、その理念はすでに定着している。一方、日本の大学では、日本語・英語に限らずライティングセンターの取り組みは始まったばかりであり、大学の正式な組織として位置づけられているプログラムはまだ限られている。早稲田大学国際教養学部が発足したライティングセンターは、日本語と英語に対応するセンターであり、その報告の中で、的確にライティングセンターの基本概念を説明している。佐渡島（2006）によれば、ライティングセンターの大きな3つの柱は、1）分野を超えたライティングの指導（Writing Across the Curriculum）、2）「過程」としての「書くこと」の指導（Writing as a process）、3）独立した書き手を育てる指導（tutoring not edition）という概念である。つまり、特定の学科だけがライティングの指導を行うのではなく、大学での成功には、どの分野でも等しくライティング力が必要であるという概念であり、学部・学科を越え共通にライティングを指導していくという取り組みである。また、ライティングの最終的な結果だけではなく、そこまでにいたる過程（ライティング課題の解釈から始まり、トピックの選定、文章の構成、推敲など）が大切であるという指導方法であり、ライティングセンターは原稿を校正する場所ではなく、ライティング力を高めるように、チューターとの対話を通して、独立した書き手になるように促す場所であるという認識である。日本での場合、日本語による文章表現、レポートの書き方について、大学全体の取組として捉え指導することであり、授業外で文章表現

のサポートが必要な学生のためにライティングセンターが組織されているということになる。

ライティングセンターの活動はさまざまであり、学生が自主的にライティングのサポートを受けることが多いが、所属学部や特定の教科の教官からセンターに行くように指導される場合もある。基本的には、授業外で一对一のライティング支援を受けるのが一般的である。また、ライティングセンターが定期的にセミナーを開催するなどその活動は幅広い。つまり「大学における文章表現力育成への多面的な支援を行う」（武井ほか、2002）場所である。

ライティングセンターの規模・運営方法は、その機関の状況によってさまざまであり、また、チューターという人材も学部生・大学院生から専門のチューター、教員がオフィスアワーとして時間を提供するものまである。ワークスタディーとして単位を与えられるものから、アルバイト料を支払われるもの、または、まったくのボランティアの場合もある。多くの場合、学生がチューターとしてセンターの運営にかかわり、そこで得るチューター側の経験もまた、学生を育てる貴重な側面であると評価されているのが特徴的である。Yasuda（2006）が指摘するように学生同士のチューターリング（peer tutoring）が、教育的に大きな意味を持っている。

本学科では、平成17年度に英語ライティング・ラボとしてプログラムを立ち上げたが、これは、センターという独立した場所が確保されていなく小規模であり、短期間の開設であることから、センターではなくライティングラボという名称にした。一般にはライティング・センターと呼ばれることが多い。

2. 国内外での取り組み

日本でのライティングセンター研究はまだ少なく、センターを設置した初期段階の報告

であり、センターの効果を測定したものはまだほとんどない。また、日本語の文書表現に関するライティングセンター、英語に関するライティングセンターのどちらともその取り組みは始まったばかりである。早稲田大学国際教養学部への取り組みは、日本語・英語両方に対応する画期的なものであり、センター報告の中、具体的な運営方法やセンターに関する詳細は、大いに参考となった。また、2006年11月に実際に早稲田大学におけるライティングセンターを見学させていただき、センター運営について話を聞くことができたことが、本学科のライティングラボ改善へのきっかけとなった。

龍谷大学ライティングセンターの報告は、日本語ライティングセンターについて述べているが、文法指導や添削指導になりがちなセンターを、「学生の論理力・思考力を高める学習・教育支援の場」と位置づけ、大学院生をチューターとして積極的に取り入れ、対話を通して学生の力を伸ばしていくという良いモデルである。指摘されている三つの問題点は、(1)センターの設置場所(2)1年次学生の活発なセンター利用を促すことの大切さ(3)チューターの育成とスーパーバイザー設置の必要性である。これらは、本学のライティングラボとの共通の問題であると改めて感じた。

大阪女学院大学における英語ライティングセンターの取り組みは、学生の自発的な利用を前提として進められており、着実に利用者確保している理想的な形である。しかし、学生はライティングセンターに推敲することを期待していて、センターの本当の目的についての認識をしていないことが多いということも明らかになった。ライティングセンターのガイドライン作成や、学生のライティング力を伸ばすワークシートを作り、学生に配布するなどの工夫について述べられている。

東京大学では、いち早く学生のアカデミッ

クライティング力の必要性を唱え、大学全体の取り組みとして英語ライティング指導のあり方を検討している。すでに、ライティング教材『ファースト・ムーヴズ (First Moves)』も出版し、カリキュラム開発にも取り組んでおり、クリティカル・ライティング・プログラムが始まっている。東京大学教養学部附属教養教育開発機構のトム・ガリー氏によると、チューターが特定のクラスの中で、ライティングの支援をする取り組みも始まっており、ライティングに関する講演会等を実施しているなど、活発である。更なるプログラム発展と独立したライティングセンターへの移行も期待される。

そのほか、アメリカの大学・コミュニティカレッジなどに設置されているライティングセンターを視察した研究がされており (Enochs & Stein 2001, 武井ほか 2002)、ライティングセンターの基本的な概念のまとめや日本で実施する場合に、全学的な取り組みが必要であること、文章表現科目担当者や専門分野担当の教員との連携が大切であるなど、検討しなくてはならない課題が指摘されている。

アメリカにおけるライティングセンターについての研究は1980年代より盛んにされており、運営に関するガイドラインや実践研究が多数見られる。

英語を第二言語 English as a second Language (ESL) とする学生によるライティングセンターの利用が増えた1990年代半ばになって、ようやく ESL への注目がされるようになったと報告されている (Williams & Severino 2004)。そこでは、文化的背景の違い ESL 学生に対するコミュニケーションのとり方や、ESL 学生の典型的なライティングの問題点など、特別なニーズを持つ ESL 学生にどのように対応していくかということが採り上げられており、日本での取り組みに参考となることも多い。

しかし、日本ではまだ EFL という環境であり、どこまでライティングの支援をするのか、添削をすることは、まったく必要のないことなのか、または、添削することでどのような学習効果があるのかなど、研究し議論を深めなければならない課題がたくさんある。チューターの人選においても、日本の大学の中でその確保は大変難しく、状況が違っている。ライティングセンターの役割・実践方法を見極め、日本での可能性を探る必要がある。

Ⅲ. 本学科英語ライティングラボの概要

このプログラムの取り組みは、平成17年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）「専門職業人となる人材の基盤的英語教育」の分野で採択された「次世代版カリキュラム開発と英語能力取得のための環境作り」の一部であり、英語能力取得のための環境作りとしてスタートした。平成17年度は、後期5週間の試験的な取り組みとなったが、学生からの反応もよく好調なスタートとなった。平成18年度は、前後期各10週間のライティングラボ開設としたが、長期間継続的に運営することで困難な点や、問題点が見えてきた。前年度のチューターからの意見を取り入れ、ライティング・ラボの運営方法の工夫や、多くの教員の協力を得て、平成19年度前期は、新しい展開を見せた。

1. 平成17年度の試験的導入

平成17年の11月中旬から5週間ライティング・ラボが開設された。月曜日から金曜日の8:50から17:40間での時間帯でラボを開き、30分刻みのスケジュールでセッションが行われた。学生は、事前に予約してライティング・ラボを利用することになっていた。チューターは英語母国語話者を2名採用して、1名は午前を、もう一名は午後を担当するというスケジュールを管理しやすい形で始めた。

チューター採用にあたっては、すでに日本での英語教育の経験があり、その中でも特にライティング指導、英語ライティングを専門にしている方を選んだ。ライティング・ラボの運営期間は、5週間という短い期間であり、ラボの運営上利用可能な人数を考慮し、英文学科2年生約140名を中心に利用した。

ライティングセンターの基本的な考え方では、学生の自発的なセンターの利用がほとんどであるが、本学の学生にとってライティングセンターという概念は日本語・英語どちらにとっても新しいものであり、どのような機能・目的を備えたセンターであるかということを理解してもらうためにも、全員に1度はライティングセンターを利用するように計画した。2年生の必修科目である英文法のクラスの中で、ライティングセンターの基本的な概念、利用方法を説明した。具体的には、英語エッセイライティングソフト、クライテリア（Criterion）を使用して、先にエッセイライティングを進め、作成した原稿をライティング・ラボを利用して、さらに良いものにするという方法をとった。少なくとも1度は、ライティング・ラボに行くことが授業の中で義務付けられた。

ライティングラボ運営にあたり、予約は事前に、ライティングセンターにあるサインアップシートに名前を記入することにした。チューターはそのスケジュールを基に、30分間のセッションで、学生のライティング力が伸びるように、2から3のポイントに絞ってアドバイスするようにお願いした。事前の打ち合わせでは、とにかく学生が英文を書くことが好きになり、少しでも長く書くように、暖かいサポートをお願いした。基本的には、2人のチューターの、これまでの指導経験や人柄に支えられた。学生は、一対一で、貴重なアドバイスをもらったと感じてくれた。中には、限られた期間に何度もセンターを利用して、英語ライティングだけではなく、英語に関する質問

をしたり、英語でのコミュニケーション能力を高めるための機会として活用していた学生もいたことは喜ばしい。

2. 平成18年度の取り組み

前年度のライティング・ラボの好調な出だしを受け、一部新しいチューターに変わったが、同じ形式で運営が始まった。今回は、前期・後期各10週間という形に変わった。同じように、2年生英文法クラスで、エッセイ課題を課し、ライティング・ラボを活用するという形をとった。英文法クラスは4クラスに分かれているので、課題を与える時期をクラスごとにずらし、ラボが一時的に混雑したり、利用者がいない週がないように工夫した。英文法クラスは、エッセイライティングだけではなく、テキストに沿った文法項目の学習が主であり、ライティング・ラボの運営がスムーズに運ぶように、授業の進度をクラスごとに考えていくには、かなり大変であった。学生は、課題の一部としてライティング・ラボを活用するが、ほかの科目のレポート提出前にラボを活用するなどの自発的な動きがあまり見られず、ラボの利用を促すために、1回のセッションを20分と短くして、一部の1年生も利用するように促した。しかし、ラボ利用率はあまり上がらなく、一部の学生の利用にとどまった。

今回、大きな問題となったのは、予約した学生が当日来ないこと（No show）であった。さらに、セッションの時間に遅れてくる学生がいること、また、遅れたことに対して何の謝罪もないなど、一部学生のマナーの悪さであった。

また、チューターからは、1回のセッションでは時間が限られており、十分なアドバイスは難しいとの声があった。チューター側からは、最終原稿提出までに、必要であれば何度でもラボを活用し、ライティング力をアップさせてほしいと願う一方、学生は、1度の

セッションで文法的な間違いをすべて指摘してほしいという意識のずれが出てしまった。

年度の終わりに、チューターと学科教員との会議を行い、ライティング・ラボ改善のための話し合いを行った。チューターからさまざまな意見や具体的な提案があり、次年度のプログラム準備の段階で、それらの意見を新しい取り組みに反映させた。

3. 平成19年度前期の取り組み

前年度チューター会議で出された、改善点を元に準備を進めることができた。チューターは、全員新しいメンバーに変わったが、日本での教育経験があるかたを採用した。プログラムが始まる前に、それぞれに基本的な方針を説明した。今回は、ゴールデンウイーク明けの5月中旬から学期末まで、約11週間という長いプログラムとなった。新しく行ったことは、学生に正しい答えをすぐ与えるのではなく、学生もライティングについて考えるように、エラーシンボルを共通で用いることにした。また、ライティング・ラボに原稿を持ってくる前に、学生が書いた文章を自分でもう一度読み返し推敲してから、持ってくるように、ライティングチェックリストを作成して、事前に学生に渡した。さらに、それぞれの学生のセッションの記録をとるように、学生ごとの記録カードを作成することにした。この記録用紙は、セッションの後、チューターが記入し、キャビネットに学生番号ごとにファイリングするようにお願いした。

さらに今回は、1年生の英作文を教えている常勤・非常勤の教員に、ライティング・ラボの趣旨を説明し、学生のライティングラボ使用を奨励するようにお願いした。従来どおり、2年生英文法のクラスの中でライティング・ラボの基本概念、利用方法を説明したが、2年生の Anthropology, Sociology, World Music といった、英語による一般教養科目の教員の協力もあり、これらの科目のレポー

ト提出前に、ライティング・ラボを利用する学生が大幅に増えた。

IV. ライティングラボ運営について

平成17年度から始まったこの取り組みは、年度によって、運営方法が一部違っているが、チューターや教員、学生などの意見も参考に改良されて現在の形になっている。これまでの、ライティングラボの運営について項目ごとに、下記のようにまとめる。

1. 設備

ライティング・ラボは、短期大学部英文学科教材開発室の一部を利用して運営を行っている。設置当初は、既存のテーブル、椅子、ホワイトボードを活用し、可動式のパーティションを借りて行っていた。



プログラムの途中から、チューターセッションを行うブースが2箇所設け、新しくパーティションも設置され、明るく快適な空間となった。また、順番を待つスペースであり、打ち合わせを行う場所として、大きなミーティングテーブルと椅子が用意された。狭いブースではなく、広いスペースでチューターセッションを好むチューターや学生は、ミーティングテーブルも活用した。さらに、学生が自由に使えるコンピュータが2台設置された。チューターブースにもコンピュータが置かれており、セッションの間に、オンライン辞書を活用し

たり、参考となる情報を調べるのに利用された。壁に設置されているホワイトボードも、説明のために利用したりすることができた。

消耗品として、ペンなどの文房具も必要に応じて供給された。辞書・参考書などもチューターデスクに置かれた。



2. 運営スタッフ

ライティング・ラボプログラム運営にあたり、専任の教員・スタッフはいなく、学科から2名の教員がプログラムの計画・コーディネート・運営に主に関わった。また、学科所属の職員が、日々のプログラム運営上の細かな作業を行い、プログラムを支えた。チューターは年度が始まる前に募集し、経歴などを参考に採用した。すべて、英語母国語話者で、日本での英語教育経験があること、大学だけではなく、中学・高校といった教育機関でも働いた経験があり、日本人学生の英語運用能力をさまざまな角度から理解している方をお願いした。

3. ラボスケジュール

初年度は、後期の後半の5週間のみの開設だったため、授業時間に合わせて、8:50分(1講義目開始時間)から17:50(5講義目終了時間)までの時間帯で行っていた。2年目からは、学期はじめは、各科目の教員から課題などは課されていないことも多く、ラボを開く必要性は低いと判断し、授業開始後約

2週間たってからラボを開くことに決めた。

時間帯は9:00から17:00までを基本の時間としたが、チューターの確保の状況に合わせて、曜日によって終了時間が一部不規則な形になっていた。チューターのスケジュールを細かく管理することは、スタッフ不足のため難しいと考え、固定のスケジュールで働くことが可能な方を採用した。突発的なスケジュールの変更は、チューター間の協力で、また、ラボを閉めることで対応した。それぞれ責任感のあるチューターであるため、当日になってチューターが不在などの状況にはならなかった。

20分ごとのセッションを行った時期もあったが、1回につき30分のセッションを行うことにしている。必要に応じて、2回続けて予約することもできる。1週間につき何回まで利用できるなどの制限は特に設けなかったが、繁忙期にはその様な対応も必要となってくる。

2年目には、予約をしたにも関わらず、無断でキャンセルする(No show)の問題が表面化したため、学生には予約をした場合は、時間通りにラボに必ず来ること、変更の場合はなるべく早く連絡するように指導した。やむを得ない当日の変更については、E-mailでその旨を連絡するようにした。(電話回線を使用できないため、ラボに関わる教員・チューター共通で使用できるeメールアドレスを取得した。)

4. ライティング支援(指導)の状況

ライティング・ラボは、「学生が書いた英語の文章に関して、アドバイスを与える場所であり、持ち込まれた文章をすべて直したり、課題を代わってする場所ではない」ということを、パンフレット(資料1)を用いて説明した。またライティングチェックリスト(資料2)を作成し、それを活用して事前に自分の書いた文章に目を通し、編集することを奨励した。さらにどこが苦手なのか、どんなこ

とを特に聞きたいのか、自ら質問をするように指導した。しかし、チューターからのアドバイスを待つ受動的な学生が多かった。

学生は、ライティング・ラボのサインアップ用紙に氏名を記入して、30分間の予約を取り、その時間にラボに行き、セッションを受けた。チューターは主に、文章のアウトラインなどの大きな流れ、文章の組み立てなどについて、アドバイスを与えた。また、必要に応じて、改善すべき項目を2から3項目に絞って、アドバイスした。チューターがすべて正しい表現を与えるのではなく、学生が考えるように、エラーシンボルを利用して、アドバイスをを行った。セッション内に時間があれば、もう一度、どのような改善をすべきか一緒に確認した。1度のセッションでは、時間不足であると感じられた場合は、課題提出前に、再度ラボに来るようにチューターから声をかけてもらった。

基本的に、事前に予約することになっているが、予約が入っていない場合は、当日でも(Drop-ins)として対応をした。また、ライティング以外でも、英語に関する質問に答えたり、英語で話をするを目的とした場合でも、可能な限り予約を受け付けた。1対一のセッションが基本であったが、2人の学生と一緒に訪れることもあった。チューターには、学生の課題や、要望を聞き可能であれば、複数の学生でも同時に対応するようにお願いした。

5. 記録

チューターにそれぞれのセッションのトピック、主なアドバイス内容について、簡単な記録を日誌の形で残すようにお願いした。平成19年度からは、学生一人ひとりのカルテとなる記録用紙(資料3)を作成し、学籍番号ごとにファイリングするようにした。これをもとに、どのチューターが対応しても、前回の資料から、さらに、その学生に合ったアドバ

イスを行うことができるようになった。

6. ライティングラボのその他の利用

主にライティング支援のためのラボであったが、学生の英語学習のさまざまな側面で有益な学習の場となった。学生の中には、ライティング以外に、英語スピーキング力向上のために、ラボを利用していただいた。定期的にラボを予約し、英語を話す機会を増やす学生も見られた。また、英語による就職面接準備や、英検2次試験対策など特定の目的のために利用することもあった。学内でさまざまなセミナーが実施されており、学生も利用しているが、意欲的な学生が、頻繁にライティングラボ活用していることは、英語に接する機会の少ない現状では、奨励すべきことである。学生の希望やニーズに対応するために、スケジュール上可能な限りどのような要望にも対応してきた。

7. 学生の反応

学期終了後に、アンケートの形でプログラムに対する評価を行っている。それによると、「ライティングチュータプログラムは成功だったと思いますか。」という問いに対して、平成17年度終了時は、約75%の学生が、18年度は、約79%の学生が「そう思う」「強くそう思う」と答えている。また、「ライティングチュータプログラムはこれからも続けるべきだと思いますか。」の問いには、平成17年度終了時は、約75%の学生が、18年度は、約83%の学生が「そう思う」「強くそう思う」と答えているおり、どちらも肯定的な反応が見られた。記述のコメントからも、一対一で受けるライティングチューターのプログラムに対して「親切に説明してくれる」「英語に関する勉強方法まで話ができる」などのコメントもある。このアンケートについては、平成19年度のプログラム終了後、その結果を合わせ、詳しく報告することにする。

V. ライティングラボ設置・運営の問題点

プログラムも3年目を向かえ、日々の運営におけるさまざまな問題点だけでなく、これからの方向性をきめる重大な検討事項が明らかになった。

1. スケジュール

学期開始2週間後の開館にもかかわらず、閑散期と繁忙期に分かれてしまった。学期末の提出締め切り日近くは、予約が取れないほどの忙しさである。また、課題がない場合は、1日の利用者が少ない。教員間で連絡を取り合い、レポートの締め切り時期などの確認をしたり、繁忙期には、2名のチューターを同じ時間に配置するなど配慮が必要である。

2. 学生への指導

添削ではなく、あくまでもチューターとの対話の中で、学生が問題点に気づき、自分自身でよい書き手になっていくことを目指しているが、チューターも学生も表面的な問題点(文法項目の間違えの指摘や適切な語句の選択)について注目することが多い。また、時間内で、ゆっくり話し合いながらライティングについて考えるというよりは、提出前にぎりぎりにライティングラボを訪れ、書かれた文章を改善するために、問題点を急いで見つけ出すような作業が多くなっている。学生に、ライティングラボの基本概念をよく説明することが必要であり、積極的な姿勢を持つように指導していくことが大切である。

一方、ライティングラボにおける添削指導の可能性について、EFLという日本の環境では、どのように考えていくべきなのか、その効果についてもさらなる議論が必要であると強く感じる。

3. チュータートレーニング

チューターは、経験のある教員を採用していることもあり、各自の裁量に多くをゆだねてしまったところがあった。チューターによって指導方法や学生との対応の仕方も違い、学生の混乱を招いてしまう場合もあるので、全てのチューターが同じスタンスで指導を行えるように、連絡を密にする必要がある。メールで意見交換をすることもあったが、学期最後にプログラムの改善点を話し合う機会を設けることができ、よい研修会となった。学期中にもこのような話し合いの機会がもてることが望ましい。

4. ガイドライン・ライティングマニュアルの欠如

具体的なセッションの流れや、ラボ運営上の細かな点、「遅れてきた学生・突然キャンセルした学生にどのようなルールを作るのか」、「明らかにインターネットの資料をコピーした学生への対応」など、初めに決めておかなければいけないいくつかの点が明らかになった。チューターに、セッションの流れ、学生とコミュニケーションの仕方のガイドラインを作成し、全チューターが共通理解を持って、ライティングラボを運営していく必要がある。それには、欧米ですでに作成されているガイドラインを参考に、日本の現状にあった形のものを作成していかなければならない。

さらに、アカデミックライティングに必要な不可欠な、ライティングマニュアルを作成し、教員・チューター・学生が、ライティングの基本的ルールを共通にしておくことも大切である。このマニュアルの作成が急がれる。

5. 教員間の連携

常勤・非常勤教員の共通の理解、また、英作文担当教員と英語による一般教養科目担当教員、その他、基礎英語科目を教える教員全体の協力がなければ、ライティングラボの成

功はない。ライティングラボの効果的な運営のために、学科に関係するすべての教員からのアドバイスやサポートで、学生のニーズを明確にし、さらによりよいライティング支援の方法を模索する必要がある。

6. デジタル化について

現在までは、「紙とペン」を主に利用した予約方法や記録用紙を使ったファイリングを行い、複雑な運営にならないようにしてきた。しかし、オンラインシステムを使った予約方法を導入したり、学生のデータをデジタル化し共有するなど、最も効率が良い方法をこれから検討していくべきである。

VI. ライティングラボの可能性

1. 英語ライティングに関する基本的な考え方を学ぶ場所

英語ライティングについて、授業以外でも支援を受け、特に英語よる一般教養科目のレポート課題に対応でき、英語表現力だけでなく、レポートの質的向上を目指している。また、セッションを通して、アカデミックライティングについて学び、論理的に考え文章を組み立て、英語を書いていくことを学び、それらを定着させることが期待できる。

2. 英語でのコミュニケーションの場所

このEFLという環境で、英語を使う機会を少しでも増やすことができることがこのプログラムの利点でもある。さらに、チューターとのコミュニケーションを通し、英語表現力を増やし、受身ではなく、能動的に英語を使う態度を育成することができると確信している。

3. 英語学習に関するリソース

チューターは、ライティングに関する知識を与えるだけでなく、学生が持つ幅広い興味・

質問に答えるリソースとなることができる。チューターの出身国に関する情報を知ること、プレゼンテーション前に発音などを練習することも可能である。出来る限りさまざまな要望にこたえることが、学生のモチベーションを上げる事につながるのではないか。

4. さまざまなレベルの学生ニーズを満たす

ライティングセンターが一部補習授業的な役割を果たすことは、これまでも言われてきたことであるが、海外での生活を経験してきた学生、英語力がきわめて高い、または、意欲的な学生に対して、それらの学生の要望に応じて、セッションをすることも可能である。学生の英語運用能力に幅のある一般の授業の中では、満足感を与えられない学生に対応していくことも、これからは大切になってくると考えられる。何よりも、ライティングラボが学生の英語力に合った対応をすることができるのが利点である。

5. 教職員などへのサポート

学生だけでなく、教員の英語ライティングについてのアドバイスを行う可能性も大きい。日本人教員として、ネイティブスピーカーに英語に関して意見を聞いたり、書いた文章についてのアドバイスをもらえることは、すばらしい環境である。また、学内のすべての教職員にこのような機会があることが大学全体の環境整備になると考えられる。

VII. 結語

本学科のライティングラボの取り組みは、学科で運営可能な範囲の限られた取り組みであり、さらに発展されることが望まれる。しかし、小規模ながら、学科単位でもライティングラボを運営することができ、これからライティングセンターを設置しようと考えている教育機関にとって、有益な情報となるであ

ろう。ライティングセンター運営上のマニュアル作成、チューターに対するガイドラインの作成、そしてチュータートレーニングの実施など、解決しなくてはいけない課題があり、更なる研究が必要であるが、学生からの反応や科目担当の教員からの肯定的な意見から、ライティングラボを維持しさらに発展させることが期待される。また、この取組が学科を越えて全学的な広がりになり、大学全体の学習環境の整備につながることを期待している。

なお、本研究は、平成17年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)「専門職業人となる人材の基盤的英語教育」の分野で採択された「次世代版カリキュラム開発と英語能力取得のための環境作り」の取組みの一部である。

[参考文献]

- 長上深雪, 2007, 「学生の力を「引き出し」, 「伸ばす」学習, 教育支援～龍谷大学ライティングセンターの取り組み～『大学教育と情報』 Vol.15 No.4 (通巻117号) http://www.juce.jp/LINK/journal/0702/03_03.html
- 佐渡島紗織, 2006, 「早稲田大学国際教養学部に発足したライティング・センターの運営と指導」『早稲田大学国語教育研究』 第26号, pp. 82-95
- 武井昭也ほか, 2002, 「アメリカの大学におけるライティングセンターの役割と機能—学習者の表現能力育成における学習支援を視野に一」『札幌国際大学紀要』 第33号, pp. 107-115
- 「ライティングセンターの活動」東京大学教養学部付属 教養教育開発機構 <http://www.komed.c.u-tokyo.ac.jp/kikou/wrilab.html>
- Enochs, Ken and Stein, Lynn (2001) "University Writing Centers: Creating a Culture of Good Writing." *ICU Language Research Bulletin* pp.17-27
- Johnston, Scott and Swenson, Tamara (2004)

“Establishing a Writing Center: Initial Findings.” *Osaka Jogakuin Tankidaigaku Kenkyuu Kiyuu*, p.p. 13-24

Yasuda, Sachiko (2006) “Japanese students' literacy background and the role of the writing center.” *The Language Teacher* 30. 5 May 2006 pp.3-6

Williams, Jessica and Severino, Carol (2004) “The writing center and second language writers.” *Journal of Second Language Writing*, 13, p.p. 165-172

資料 1

Hokusei Gakuen Junior College English Writing Lab

Our writing lab provides face-to-face writing instruction. You can bring your essays, reports, speech drafts, and any kinds of written texts to the lab and experienced tutors will help you develop your writing.

Writing tutors **will**

- answer your questions.
- help you organize your essay.
- help you revise your essay.
- help you find better English expressions.

Writing tutors **cannot**

- do writing assignments for you.
- proofread your writing. (You should proofread before coming to the lab.)
- find all the mistakes and errors in your writing.
(Tutors will discuss major points to be improved in your writing.)

How to meet your writing tutor

- English Writing Lab schedule is posted at the Kyouzai Kaihatsu shitsu. (Building A 6F)
- Schedule your appointment at Kyouzai Kaihatsu shitsu one week in advance.
- Come to the lab on time.
(You have only 20 minutes to talk with your tutor so don't be late.)
- Bring typed papers.
- Be sure to proofread and revise your paper before coming to the lab.

Drop-ins (No appointment visitors)

If there are some openings in the schedule, you can stop by the writing lab and ask tutors some questions in English. It is a good chance for you to practice English speaking.

資料 2

2nd Year English Composition Check List	1 st	2 nd	3 rd	4 th
Student number_____ class_____ Date checked	_____	_____	_____	_____
Student name _____ Checkers name	_____	_____	_____	_____
Are all your paragraphs in paragraph style? (全ての段落はパラグラフの形式をとっていますか)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Does each paragraph have a topic sentence? (それぞれの段落にトピック・センテンスは含まれていますか)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
For each paragraph, do all sentences relate to the topic sentence? (段落の内容は全てトピック・センテンスに関連する文章ですか)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
For each paragraph, is there more than one supporting sentence? (段落ごとにトピック・センテンスに関するサポート・センテンスは含まれていますか)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Is there an introductory paragraph? (イントロダクションの段落はありますか)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Is there a concluding paragraph? (結論の段落はありますか)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Is there a mix of simple and complex sentences? (単文と複文の両方が使われていますか)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Did you check your punctuation, capitals, and plurals? (句読点, 大文字・小文字, 複数形など, 間違いがないか確認はしましたか)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Did you read your composition entirely in one sitting at least once? (最初から最後まで少なくとも一度は読みましたか)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Comments:				

資料 3

Student Number _____ Student Name _____

Date		Time	
Student was..	<input type="checkbox"/> on time	<input type="checkbox"/> late	<input type="checkbox"/> no show
Tutor Name			
Title of Assignment/ Topic			
Class Name			
Corrections/ Revisions			
Comments/ Suggestions			

[Abstract]

Establishing and Managing an English Writing Lab :
Possibilities of Writing Tutors Program

Kyoko MORIKOSHI

An English writing lab was set up at Hokusei Gakuen University Junior College as a pilot project in 2005 with a grant from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. Since then the lab has been open from 9:00 to 17:00 every day, for about ten weeks each semester. This paper reports on how the lab was started, and what the difficulties and problems were in managing the writing lab in Japan. The idea of writing centers/labs is unfamiliar to most Japanese students, so it was quite difficult to introduce this new concept. The students were usually passive during the sessions, though the basic idea of the writing center is that students and tutors work collaboratively to help students learn to be better writers. There were many things that needed to be decided in order to manage the lab effectively. Guidelines for tutors were necessary to provide good sessions to all students equally. More tutor training and discussion between tutors and teachers was necessary to improve the lab. This paper also discusses the possibilities of the writing lab as a self-access center for English learners. The tutorial sessions are done in English so that students enjoy conversing with the tutors. Besides helping students' writing, the tutors were able to give support in every aspect of English learning. English writing labs can be a great place for Japanese students to learn not only English writing, but also to communicate in English.

Key Words : Writing Center, tutors, English as a Foreign Language (EFL),

